

佳作賞

「海を渡る蝶」

『あるかいど』45号

木村誠子氏

木村誠子（きむら・せいこ）

一九五三年生大阪生まれ。兵庫県小野市在住。

大阪芸大演劇科中退、愛知大学仏文学卒。

二〇〇〇年から大阪文学学校に三年在籍。「境界線」で

第二十二回大阪文学学校賞佳作。二〇〇一年から同人誌

「あるかいど」所属（編集委員）。

二〇一〇年『ガンガの風』（クリタ舎）出版。

上智大学「グリーンフケア研究所」に在籍中。

職業ピアノ教師。

供より親が大事と思いたい」若き日の声を聞きながら、サラは短すぎたチチとの時間を辿っていく。子供の頃、一緒に取りに行ったアリジゴクのことなど、仕事先だった六甲山にあるホテルのバーでチチと虫の話をしたことを思い出しながら、サラはチチが遺していったものを知るようになる。それは、夢と現実の狭間に生きるいのちの儚さだった。

石垣島のホテルに着いたサラは、イエヤマボタルの見学を頼む。ガイドの野島に、「アサギマダラは、自分が生きていきやすい場所を探し求めながら飛び続ける」と教えられる。夜のジャングルに入っていくと、風に煽られたホテルが真つ逆さまに落ちていく。死者の靈魂を感じて闇を見つめるサラに、野島が「浜のいきものを見に行こう」と声をかけるが、浜辺も風が強く、ふたりは小屋で過ごす。

泡盛を飲みながら、「五年前この海へチチの遺灰まいいたときのダイバー」のことを話すサラに、「弟のイツキだ」と野島が告げる。その年の夏、ダイバーだった弟は、客の命を守ろうとしてこの海で死んだ。野島の言葉で、ふたりは大きな波のうねりに飲み込まれるかのように結ばれる。埋めあえるものがここにあると、野島は「このひとつぶが、海に生きたいきもの亡骸」と砂を零し、珊瑚の風鈴をぶらさげる。サラは野島のからだのなかで、海を泳ぐ魚のように解放されていく。そして寝物語のように、野島は自分が

主人公のサラは、二十歳の誕生日にチチを喪った。「チチ」はサラが初めて口にした言葉で、以来父親をそう呼んでいる。二十五歳の誕生日を迎えた朝、チチの夢を見る。蝶を追い求めて駆け出すサラに「行くんじゃない!」、チチが叫んだ声で目覚める。チチの手の届かない「アサギマダラの渡り」を無意識のうちに感じながら、サラは大雨のなかダイビング機材をもって神戸空港へ向かう。

毎年、命日のその日、チチの遺灰をまいた石垣島の海へ潜りにいく。死を前にしたチチが最期に会いたかったものが、それが、日本で唯一渡りをする蝶「アサギマダラ」だった。チチの青春時代の思い出が「夢」に出てきて、「あんなに美しいものを初めてみた」と入院先でサラに語る。本土と石垣島を繋ぐ蝶との出会いはチチの夢であり、サラの夢となった。サラには、スキューバダイビングの教室で出会った恋人のタツヤがいる。いいヤツだけど、悲しみを抱えていないタツヤには「夢」のはなしができない。サラにとつての「夢」は、喪の時間でもあった。飛行機のなかで、母から届いた「これはチチからの贈り物です」というカセットテープを聞く。サラが生まれたときに吹き込んで、産後の妻へ届けたテープから太宰の「桜桃」が流れる。「子

生まれた島パナリのことを話し出す。子供の頃、浜に打ち上げられた死骸を拾って歩いては海に返した弟は、自ら還っていくかのように海で死んだ。貧しい暮らしだった父親は「夢」を求め、島を見捨てた。だから、「氏神さまは縁を切ってしまった」と海に奪われた息子を嘆いて死ぬ。けものみちとなる夜の浜に足を踏み入れた母親は男と島を出、遺骨になって戻る。「親父とおふくろとイツキがいなくなつて気づいたんだ。ほくの背骨をつくってくれたのは、パナリだつて」。いつ終わるとも知れないパナリのはなしを聞きながら、サラは野島の膝のなかでうとうと夢を見る。まっ白な蝶が、浅黄色に変わつて飛翔していく。まるで自分自身がアサギマダラの翅になったように感じて目が覚めると、「どんな夢？」と野島が訊く。サラの「夢」のはなしに、「やつと、アサギマダラに会うことができたんだね」と野島が言う。朝がきて、「いつまで、この島にいられる？」と野島が訊く。野島の背骨が何からできたかを知り、その背骨を信じたことができたサラは、過去と未来を繋ぐようにまっすぐ伸びた背中に、「ワタリオエルマデ」と指文字で描いた。それに応えるように野島が言う。「朝陽が上つたら、一緒にこの海に潜ろう。海底の珊瑚のガレ場は死の世界にみえるけれど、いのちを産み出す場所でもあるんだ。それを君に見せてあげたい」。